

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01940

研究課題名(和文) オーストリアの観光事業における「ハプスブルク・イメージ」に関する文化史的研究

研究課題名(英文) Cultural historical research about "Habsburg images" in tourism of Austria

研究代表者

小宮 正安 (Komiya, Masayasu)

横浜国立大学・大学院都市イノベーション研究院・教授

研究者番号：80396548

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、文化史の視点から、オーストリアにおけるハプスブルク家の遺産やそこから敷衍されるイメージの観光資源としての活用法に焦点を当てたものである。とりわけ第一次世界大戦で巨大な領土を喪失したオーストリアでは、第一次・第二次産業の縮小が余儀なくされる一方、観光事業が国家経済の重要な柱として位置づけられた結果、帝政から共和制へという政変の中にもありながらも、ハプスブルク家の遺産が早い時期から観光資源として活用された。これらの事由を背景に、観光の分野における「ハプスブルク家」という名前の持つイメージ、つまり「ハプスブルク・イメージ」と、オーストリアが観光立国として歩んでいった過程を詳らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on the heritage of the Habsburg family in Austria from the viewpoint of cultural history and its application as a tourism resource of images to be extended from it. Especially in Austria, where the giant territory was lost in the First World War, the first and second industries are forced to shrink, while as a result of the tourism business being positioned as an important pillar of the national economy, Although it is in the political change to Habsburg, heritage of the Habsburg family has been utilized as a tourist resource since an early period. Based on these grounds, I have detailed the process of tourism of Austria, which went as a tourism nation with the image, namely the "Habsburg image".

研究分野：ヨーロッパ文化史

キーワード：文化史 観光学 オーストリア史 中欧史 地域研究 近現代社会史

1. 研究開始当初の背景

申請者は本研究に至るまで2度に渡る科学研究費補助金の助成を受け、オーストリアと首都ウィーンをフィールドに、音楽を切り口とした観光事業の歴史について研究を重ねてきた。その過程において、オーストリアが観光の分野において「音楽国家」として自己PRを展開する際、そこにはハプスブルク家、あるいは彼らが支配者として君臨したいわゆるハプスブルク帝国のイメージが決定的影響を及ぼしていることが明らかになった。

じっさいオーストリアには、ハプスブルク家の文化遺産が数多く残されており、それらの多くは同国にとっての重要な観光資源として積極的に活用されている。さらにいわば「ハプスブルク・イメージ」を用いた広告戦略や販売戦略は、今日に至るまでオーストリアの観光産業においては重要な役割を果たしている。

近年こうした状況を踏まえ、オーストリアにおけるハプスブルク家の文化遺産と観光との関係について迫ろうとする研究が徐々に増えつつある。ウィーン郊外の離宮シェーンブルン宮殿の歴史を、観光客をメインとする多様な訪問者の実態を切り口に解き明かしたゲオルク・シュライバーによるアプローチは、その一例といえよう。またそのような状況を受け、申請者自身『ハプスブルク家の宮殿』(講談社現代新書 2004年刊行)を著し、同宮殿に表象された歴代ハプスブルク君主の統治メッセージ、ならびにそうしたメッセージが形成されるに至った社会的背景の分析をおこなった。さらに同書の最終章では、ハプスブルク家の支配体制が崩壊した1919年に、同宮殿が一般公開され、オーストリアの重要な観光遺産として現在に至っている経緯を明らかにした。

2. 研究の目的

上のような状況が存在したにもかかわらず、オーストリアの観光政策における「ハプスブルク・イメージ」そのものについて、歴史的に掘り下げた研究は未だかつて存在しなかった。

なお研究開始にあたっての予備調査では、オーストリア共和国では、ハプスブルク家に対し厳しい政治的姿勢が貫かれ、ハプスブルク宗家の入国不許可、ハプスブルク家の財産の没収等の徹底的な処置がとられたことが明らかになっていた。シェーンブルン宮殿のようにハプスブルク家の遺産が公開されることにも、特権階級の私有物を公のものとして開示し、彼らのライフスタイルを贅沢華美なものとして糾弾する狙いも含まれていた。だが同時に、オーストリアは観光事業を経済の重要な柱として位置づけたため、ハプスブルク家の遺産を観光資源として活用せざるをえず、観光客の側も共和国がハプスブルク家の遺産活用に対して当初抱いていた意図とは異なる形で、つまりハプスブルク家への憧憬ゆえにそれらの観光資源を訪れる現象が生まれた。

このようにして、オーストリア共和国側も殊観光政策の分野においては「ハプスブルク・イメージ」を押し出した姿勢を打ち出すようになった、というのが研究開始当初の仮説であった。にもかかわらず、それがいつどのように形成され、現在見られるような「ハプスブルク・イメージ」を全面的に強調した観光政策へとつながっていったのかについては、未知数の部分がきわめて多かった。またその結果、オーストリアの観光政策の重要な要素として「ハプスブルク・イメージ」が存在するという漠然とした感覚のみが先行し、いかなる文化的背景の中に、両者の関係が形成されてきたのかという問題意識が顧みられなくなってしまっている、という現実があった。

3. 研究の方法

このようなテーマにアプローチする場合には、政治史や建築史、美術史といった視点はもちろんのこと、それらの学問領域では必ずしも掬い上げることのできない、あるいはそれらの学問領域を複合的に活用することが可能な文化史的アプローチを用いた。とりわけ、「ハプスブルク・イメージ」をきわめて幅広い層に訴えかけたキツチュマがいのハプスブルク関係の土産物や、ハプスブルク関係のショーといったものが現実にオーストリアの観光事業を活性化させてきた経緯を考える時、これらの対象に迫る方法としては、人間の営みを幅広い視点から捉える文化史の方法が有意義であった。

時代的には、オーストリアが観光立国として本格的な歩みを始めた第一次世界大戦後から現代までを扱うものとする。ただしツーリズムが誕生する中、未だハプスブルク家の支配が続いていた、つまりハプスブルク家の文化遺産が私有化されていた帝政末期についても、共和国以降との比較をおこなう意味で調査をおこなう。この帝政末期を嚆矢として、その後オーストリアが辿った第一次共和制、ナチス支配、四カ国支配、第二次共和制というそれぞれの政治形態の中で、オーストリアがみずから「観光立国」たらしめようとした軌跡、ならびにその中心に「ハプスブルク・イメージ」を置くようになった社会的・文化的背景を探った。またオーストリアの観光政策における「ハプスブルク・イメージ」の歴史を探るためには、オーストリアにおける観光事業の歴史についても研究をおこなうことが必要であった。申請者は既に、「モーツァルト・ツーリズム」や「音楽都市ウィーンイメージの形成」といった切り口からオーストリア観光の歴史を研究してきたが、本研究では音楽のみにかぎらず、それを包括する「ハプスブルク・イメージ」というより広範な視点から、特に20世紀以降のオ

ーストリアにおける観光事業の展開についてより詳細かつ包括的な検証をおこなった。

これらの視点からオーストリアを捉え直すことにより、1) オーストリアが「観光立国」となるにあたって「ハプスブルク・イメージ」がいかなる役割を果たしたか、そこから演繹される2) 観光事業におけるイメージの確立の方法と可能性、3) 文化遺産とそれにまつわるイメージにまつわる観光事業の役割と影響力、といった、相互に関わりあう問題の解明に向け、考察と研究を展開した。また逆にオーストリア以外の他の地域、とりわけその観光産業にとって一大マーケットである4) 日本において「ハプスブルク・イメージ」がどのような形で受け入れられてきたかという受容史の側面についても詳細な分析をおこない、5) 「ハプスブルク・イメージ」の形成に見るこれからの我が国のツーリズムに対する方法論の検討と提言へ向けた検証と分析をおこなった。

4. 研究成果

平成27年度は、帝政末期ならびに共和制が誕生して以降のオーストリアにおける「ハプスブルク・イメージ」の歴史を俯瞰し、A) 過去の為政者の文化遺産を用いた国家ならびに地域の観光政策の方法、B) 政治と観光の相互関係について、文化史というアプローチからそれらをいかに分析できるかを多角的に検討した。時代的には、1) 帝政末期から第一共和国初期にかけての「ハプスブルク・イメージ」の位置づけと観光事業との結びつき、2) 1920年代から30年代にかけてのマス・ツーリズムの萌芽期における「ハプスブルク・イメージ」とオーストリアの観光政策の変化、3) ナチス・ドイツ占領下・四カ国統治下における「ハプスブルク・イメージ」の利用の

実態、4) 1955年に主権を復活して以降の第二共和国におけるマス・ツーリズムの発展と「ハプスブルク・イメージ」の世界的展開、5) EU加盟以降のオーストリアにおける新たな観光政策としての「ハプスブルク・ツーリズム」という5つの時代と5つのトピックに区分をおこなった上で、詳細な調査を重ねた。当然このテーマに関わる資料はオーストリアに数多く存在しているため、現地と連絡をとりながら、以下のような資料収集をおこなった。

1) 当研究において質・量ともに最大の資料が所蔵されている場所として、ハプスブルク家の遺産が数多く残され、その多くが観光資源として活用されているウィーンのウィーン博物館(旧ウィーン市立歴史博物館)をメイン・フィールドに、調査や資料収集をおこなった。同博物館自体、ウィーンに存在するハプスブルク家の文化遺産を用いた資料館や記念館(エリーザベト皇后の私邸であったヘルメス・ヴィラや、シェーンブルン宮殿に隣接する宮廷駅舎)の運営・管理母体であり、またオーストリアの観光政策や「ハプスブルク・イメージ」と密接に関係する紙媒体の記録から土産物に至るまでの多様な資料を有している、というのがその理由である。

2) 上記博物館所蔵以外の資料については、ハプスブルク・イメージと観光との関わりを念頭に、オーストリアにおけるハプスブルク関係ならびに観光関係の資料を有している様々な機関や団体において、多角的な調査を展開した。具体的には、これまでも科学研究補助金による研究を通じて密接なコンタクトをとってきたウィーン楽友協会資料館館長のオットー・ビーバ博士、副館長のイングリート・フックス博士をはじめ、ウィーン大学の

ヴィルヘルム・ヨハネス講師、オーストリア国内の多くのハプスブルク家関係の文化遺産に詳しいウィーン国立歌劇場管弦楽団ならびにウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の元コンサートマスターのヴェルナー・ヒンク教授等からの具体的助言を仰いだ。

平成28年度は、平成27年度の調査を継続しつつ、オーストリアにおけるハプスブルク家ゆかりの代表的な都市であるウィーンを中心に、インスブルックやザルツブルク、メルク等を具体的な事例に据えながら、観光政策を通じて浮かび上がるハプスブルク・イメージの変遷、ならびにそのようなイメージに基づいて作られる各都市のイメージが「観光立国オーストリア」にいかなる形で反映されていたのか、という問題についての詳細な分析をおこなった。この作業においては前年の調査ならびに研究を顧慮しつつ、特に1)ハプスブルク帝国滅亡後、第一共和制が誕生する中で、ハプスブルク家に対する政治的批判のいっぽうで、「ハプスブルク・イメージ」が観光事業の重要な要素として浮上した経緯、2)オーストリア共和国の「対ハプスブルク政策」と観光事業の分野における「ハプスブルク・イメージ」の位置づけの変遷、というトピックを中心に、時代的には1)帝政末期から第一共和国初期にかけての「ハプスブルク・イメージ」の位置づけと観光事業との結びつき、2)1920年代から30年代にかけてのマス・ツーリズムの萌芽期における「ハプスブルク・イメージ」とオーストリアの観光政策の変化、3)ナチス・ドイツ占領下・四カ国統治下における「ハプスブルク・イメージ」の利用の実態、についての研究をおこなった。調査にあたっては、平成27年度に引き続き、ウィーン市立歴史博

物館をはじめとする機関で資料収集をおこないながら、それらの資料に対して詳細な検討を加えていった。

平成29年度は平成28年度の研究および調査を受けつつ、1)民間レベル(観光産業、観光業等)における「ハブスブルク・イメージ」の受容と発展の歴史に関する検証を推し進めるとともに、2)かつての支配者の文化遺産をめぐる日頃のツーリズムの比較分析を通じ、5)我が国における「ハブスブルク・イメージ」を活用したオーストリアの観光政策の実情というトピックに関し特に詳細な分析をおこないつつ、時代的には1)1955年に主権を復活して以降の第二共和国におけるマス・ツーリズムの発展と「ハブスブルク・イメージ」の世界的展開、2)EU加盟以降のオーストリアにおける新たな観光政策としての「ハブスブルク・ツーリズム」の展開について研究をおこない、それらを総合して「ハブスブルク・イメージ」の形成に見るこれからの我が国のツーリズムに対する方法論の検討と提言へ向けた検証と分析をおこなった。またこれらの研究によって得られた知見は、5.に記述する成果物のみならず、相模原市のインバウンド観光に関する受託研究および提言、NHK『ウィーン・フィル・ニューイヤーコンサート』『ららら クラシック』等における解説等において、広く発信をおこなった。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計19件)

- 1) 論説:「ウィーン国立歌劇場」日本公演の歩み、小宮正安、日本経済新聞朝刊2016年3月21日、26ページ、査読なし
- 2) 論説:世巻探見「モーツァルトの街

ザルツブルク」の意外な偉人、小宮正安、石巻日日新聞2016年5月25日、5ページ、査読なし

- 3) 論説:世巻探見「モーツァルトの街」を作ろう!、小宮正安、石巻日日新聞2016年6月1日、5ページ、査読なし
- 4) 論説:世巻探見 モーツァルトが街の宝になるまで、小宮正安、石巻日日新聞2016年6月9日、5ページ、査読なし
- 5) 論説:音楽祭は多彩に響く1 パイロイト音楽祭、小宮正安、日本経済新聞夕刊2017年3月1日、16ページ、査読なし
- 6) 論説:音楽祭は多彩に響く2 ザルツブルク音楽祭、小宮正安、日本経済新聞夕刊2017年3月8日、16ページ、査読なし
- 7) 論説:音楽祭は多彩に響く3 ヴェローナ音楽祭、小宮正安、日本経済新聞夕刊2017年3月15日、16ページ、査読なし
- 8) 論説:音楽祭は多彩に響く4 タングルウッド音楽祭、小宮正安、日本経済新聞夕刊2017年3月22日、16ページ、査読なし
- 9) 論説:音楽祭は多彩に響く5 マールボロ音楽祭、小宮正安、日本経済新聞夕刊2017年3月29日、16ページ、査読なし
- 10) 論説:知られざるウィーン1 楽友協会はここから生まれた、小宮正安、春秋2017年2・3月号(春秋社) 巻頭ページ、査読なし
- 11) 論説:知られざるウィーン2 市場はトルコの香り、小宮正安、2017年春秋4月号(春秋社) 巻頭ページ、査読なし
- 12) 論説:知られざるウィーン3 子供のためのオペラ、小宮正安、春秋2017年5月号(春秋社) 巻頭ページ、査読なし
- 13) 論説:知られざるウィーン4 教会の長い夜、小宮正安、春秋2017年6月号(春秋社) 巻頭ページ、査読なし
- 14) 論説:知られざるウィーン5 舞臺博物館、小宮正安、春秋2017年7月号(春

秋社) 巻頭ページ、査読なし

15) 論説：知られざるウィーン6 オーガニックな魚屋ホイリゲ、小宮正安、春秋
2017年8・9月号(春秋社) 巻頭ページ、
査読なし

16) 論説：知られざるウィーン7 ハブスブルク家の文化遺産、小宮正安、春秋
2017年10月号(春秋社) 巻頭ページ、
査読なし

17) 論説：知られざるウィーン8 街外れのベートーヴェン記念館、小宮正安、春秋
2017年11月号(春秋社) 巻頭ページ、
査読なし

18) 論説：知られざるウィーン9 聖ニコラウスとクランプス、小宮正安、春秋
2017年12月号(春秋社) 巻頭ページ、
査読なし

19) 論説：知られざるウィーン10 けっして忘れない、小宮正安、春秋 2018年1月号(春秋社) 巻頭ページ、査読なし

[学会発表](計2件)

1) Das Bild von Constanz Mozart in Japan、小宮正安、Internationale Stiftung Mozarteum (Salzburg)、2015年10月

2) The Image of Vienna as a “Music-Metropolitan” in Japanese Travel Materials ~or exploring the possibility to create a music topos in Japan~、小宮正安、Cultural Typhoon in Europa (Vienna)、2016年9月

[図書](計4件)

1) コンスタンツェ・モーツァルト ~ <悪妻> 伝説の虚実 ~、小宮正安 (単著)、講談社選書メチエ、1-318ページ

2) ウィーン・フィル コンサートマスターの楽屋から、小宮正安 (構成・訳)、ウエルナー・ヒンク (語り)、アルテスパブリッシング、1-280ページ

3) コモンズ・スコラ vol.17 ロマン派音楽、小宮正安 (単著)、エイベックスエンタテイメント株式会社、98-103、128-129ページ

4) <驚異>の文化史 ~中東とヨーロッパを中心に~、山中由里子(1、14番目)、小宮正安 (24番目) 他19名、山中由里子名古屋大学出版会、528ページ

[その他]
ホームページ等
er-web.jmk.ynu.ac.jp/html/KOMIYA_Masayasu/ja.html

6. 研究組織
(1)研究代表者
小宮正安 (KOMIYA, Masayasu) 横浜国立大学・大学院都市イノベーション研究院・教授

研究者番号：80396548

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：

(4)研究協力者
オットー・ビーバ(ウィーン楽友協会資料館館長)
イングリット・フックス(ウィーン楽友協会資料館副館長)
ヨハネス・ヴィルヘルム(ウィーン大学講師)
ウエルナー・ヒンク(ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団元コンサートマスター)